

発熱

嘔吐

下痢

腹痛

喘鳴

咳

発疹・湿疹

けいれん

誤飲

必携!

お子さんの
急病対応ガイドブック

～子ども急病時!こんな時どうするの?～



高知県

はじめに

はじめに

お子さんが、夜間に急に熱が出て元気がなくなりぐったりしてしまった。みなさん、こんな経験をお持ちではないでしょうか。日頃、お子さんが元気なときは、急病時の対応などは考えず、いざ具合が悪くなった時に慌ててしまうことはないですか。

この度、高知県内の小児科医の協力により、発熱や嘔吐（おうと）など、よくある症状ごとに、観察のポイントや家庭での対応をわかりやすくまとめた「必携！お子さんの急病対応ガイドブック」を作成いたしました。

お子さんの具合が悪くなった時に、しばらく様子を見てもいいのか、医療機関に急いで受診した方がいいのかなど症状に合わせて具体的な対処法を記載していますので、日頃からお読みいただき急病時の判断の目安に役立てていただけたら幸いです。

このガイドブックでは、「至急受診」「急いで受診」「様子を見ながら受診」の3段階に分けて緊急の度合いを区分しています。

①至 急 受 診 → 救急車を使ってもよいのですのですぐに受診する

②急 い で 受 診 → 夜間・休日でも受診する

③様子を見ながら受診 → 夜間・休日なら翌朝に受診する

(目次)

- (1) 「急いで受診」してほしい症状・・・・・・・・・・ 2
- (2) 上手な小児科受診のポイント・・・・・・・・・・ 2
- (3) 発熱（はつねつ）・・・・・・・・・・ 3
- (4) 嘔吐（おうと）・・・・・・・・・・ 5
- (5) 下痢（げり）・・・・・・・・・・ 7
- (6) 腹痛（ふくつう）・・・・・・・・・・ 9
- (7) 喘鳴（ぜんめい）・・・・・・・・・・ 11
- (8) 咳（せき）・・・・・・・・・・ 12
- (9) 発疹・湿疹（ほっしん・しっしん）・・・・・・・・ 13
- (10) けいれん（ひきつけ）・・・・・・・・・・ 14
- (11) 誤飲（ごいん）・・・・・・・・・・ 15
- (12) 夜間や休日に急に具合が悪くなったとき・・・・ 17
- (13) 家庭用メモ・・・・・・・・・・ 18

「急いで受診」してほしい症状

「急いで受診」してほしい症状の主なものとして以下のものがあります。

1. 咳が強く、呼吸が苦しくて眠れない・横になれない（息が苦しそう）
2. うとうと眠っていて、起こしても起きない（意識がおかしい）
3. 初めてのけいれん、5分以上の長いけいれん、繰り返すけいれん
4. 強い痛み（腹痛、頭痛、体の痛み）
5. 顔色が悪い、ぐったりしている、元気がない、機嫌が悪い状態が続く
6. 食事を食べないだけでなく、半日以上水分が取れない
7. おう吐や下痢の回数が多く、顔色が悪く、ぐったりしている
8. なんとなくいつもと違う、元気がない、おかしい（保護者の感覚も大切）

その中でも特に、①～④があれば「至急受診」してください

- ①息が苦しそう
- ②意識がおかしい
- ③初めてのけいれん、長いけいれん
- ④強い痛み

医師は、聴診器をあてたり、喉を見るだけでは病気の診断はできません。正しい診断＝正しい治療のためにはお母さん方の情報がとても大切です。

そこで、小児科を受診する際のポイントをまとめてみました。初めは難しいと思っても、何回か受診するうちに、子どもの病気の対応に慣れてきますので、安心してください。

上手な小児科受診のポイント

1. お子さんの体質などをよく知っているかかりつけ医を持ちましょう
2. できるだけ診療体制の整っている平日の昼間に受診しましょう
3. 病状を時間の経過とともに話してくださいー簡単にメモしておくとういでしょうー
4. 熱の変化だけでなく、咳（せき）・嘔吐（おうと）・下痢（げり）など熱に伴う症状も話してください
5. 心配していることも話してください
6. 検査の希望があれば話してください
ーしかし、夜間や休日には検査ができない場合がありますー
7. 診察・検査・薬などで疑問点があれば質問してください
8. 症状が改善しない、気になる症状が出てきたら再度受診してください

発熱（はつねつ）

1 子どもが熱を出した！

子どもは、夕方から夜にかけて発熱することが多いものです。そこで、ご両親があわてても、決して良いことはありません。

熱があっても機嫌よく遊んでいるか、すやすや眠っている時は、あわてずに様子を見ましょう。

39～40℃の高熱になると、ふらふらしたり、少しぐったりしたり、機嫌が悪くなりますが、熱が下がり、それらがよくなるようなら、翌日まで様子を見ていても大丈夫です。



2 熱が出たら、どうするの？

熱は、体が外敵のウイルスや細菌と闘っている証拠です。必ずしも熱を下げなくてもよいのですが（特に生後6ヶ月以下の乳児）、熱を下げると体が楽になり、元気が出て少し食べられるようになったり、ぐっすり眠ることができるようになりますので、熱を下げる工夫も必要です。

お子さんの熱を下げるには、次のような方法があります。

水枕で体を冷やす（まずビニール袋に冷たい水道の水を袋の3分の1程度くらい入れます。袋の中に空気があまり残っていないように、水面の少し上からねじるようにして、袋の口から水が漏れないように締めて下さい。2つ作って、これを首の両側や両方の脇の下に置いてください。）

ぬるま湯でひたしたおしぼりで全身を拭いてあげても、体温は穏やかに下がります。冷やした保冷剤を薄いタオルで包んで、服の上から脇の下などにあてておくのも良いでしょう。冷たすぎて嫌がる場合は中止しましょう。



もし、最近もらった解熱剤（げねつざい：熱を下げる薬のこと）があるなら、使ってみても良いでしょう。内服する解熱剤と、肛門から入れる坐剤の解熱剤とがありますが、効果は同じですので使いやすい解熱剤を使いましょう。



解熱剤で熱が下がり始めるには、約30分程度かかります。解熱剤で熱が下がっても、下がっている時間はせいぜい4～5時間で、時間が過ぎれば、また、熱が上がってきます。熱の勢いが強いと38℃台までしか下がらず、効いている時間も短いことも覚えておきましょう。熱が下がると元気になり、上がるとぐったりすることを繰り返しながら、風邪なら平均3～4日で解熱します。熱の上がり下がりに一喜一憂しすぎないで、全身の状態に目を向けましょう。

熱さまし用シートをヒタイ（額）などに貼るのは冷やす面積が小さくて、熱を下げる効果は少ないのですが、子どもにとって気持ちよいのであれば使用しても構いません。

3 熱は一旦下がったけど・・・

お子さんの体温が38℃程度に下がって、すやすや眠り始めるか、機嫌が良くなるようでしたら、急を要する病気ではないことが多いのです。朝になったら、落ち着いてかかりつけの小児科を受診しましょう。

体温は下がったのに、まだ機嫌が悪い、グズる、呼吸が荒いなどの症状が続けば「急いで受診」しましょう。



こんな場合は

熱が38.5℃程度（生後3ヵ月までは38℃以下）
 様子がいつもとそれほど変わらない
 機嫌（ぎげん）が良い
 顔色が良い

少し様子を見てみましょう

こんな場合は

けいれんする
 様子がいつもと違っておかしい
 繰り返し嘔吐する
 機嫌が悪い状態が続く
 顔色が悪い状態が続く

急いで受診しましょう

嘔吐（おうと）

1 子どもが吐いた！

子どもが嘔吐する原因はいろいろありますが、赤ちゃんが1日に数回ミルクを嘔吐する、咳とともに嘔吐する、食べ過ぎて嘔吐する、もともと熱が出ると嘔吐しやすい場合などはあまり心配ありません。

吐き気が続く時には、吐いたものを気管に吸い込まないようにお子さんの体を横向けにしましょう。お子さんが吐いても、あわてずにお子さんの様子を観察してください。

体を横向きにして吐いたものを吸い込まないようにする



2 吐いたらどうするの？

吐いたものに血液とか黄色や緑色の液が入っていないかなどをみましょう。

お腹をさすってみて、痛がる場所はないか、張っていないかなどをみましょう。

お子さんが吐いた後で“キーッ”というような激しい泣き方を繰り返すようなら、「急いで受診」しましょう。

吐いたものに血液とかが入っていないか確認



激しい泣き方を繰り返すようなら急いで病院へ



3 吐き気がとまったら

水、お茶か幼児用イオン飲料などを少しずつ（1回20～30ml、小さいコップに1/4程度）飲ませてみましょう。吐かなければ、5～10分おきに飲ませてみます。4、5回飲ませて吐かないようなら、様子みても大丈夫でしょう。

注：オレンジなどの柑橘系の飲み物や炭酸飲料、牛乳などは、吐き気をひどくさせますので飲ませないようにしましょう。

炭酸飲料、牛乳などは飲ませてはダメ！



水やお茶などをスプーンで少しずつ飲ませてみる



少し様子を見てみましょう

こんな場合は

水分が少しずつとれる
下痢や発熱などがない
吐いた後、ケロツとして機嫌が良い



こんな場合は

続けて何回も吐く
意識がぼんやりしている
けいれん（ひきつけ）がある
強い腹痛や頭痛がある
便に血液がついている

急いで受診しましょう



続けて何回も吐くわ病院へ



下痢(げり)

1 子どもが下痢をした!

お腹を冷やさないようにします。
どのような下痢が観察しましょう。

水のようなか、泥のようなか、血液が付いているか、ネバネバした粘液が付いているかなどは診断のために非常に役立ちますので観察しておいて下さい。

また便をオムツにしたなら、オムツを残しておきましょう。オムツをしていないなら、下痢便の一部をビニール袋に入れておいて、診察を受けるときに持ってきてください。

水のようなか
泥のようなか
血液が付いているか
ネバネバした粘液が
付いているか
確認



下痢便をした
オムツはビニール袋に入れて
診察を受ける時に持参



下痢便の回数と
症状、
おしっこの回数は
メモしておく



乳幼児では
長くても
3時間程度で
イオン飲料などを
飲ませる



2 下痢をしたらどうするの?

下痢便の回数と性状(血液や粘液が混じっていないか、水のような便かなど)や、おしっこの回数や時刻もメモしておきましょう。発熱、発疹のある・なしも確認してください。

母乳はそのまま飲ませてよいでしょう。

母乳でなければ、最初は白湯(さゆ)またはイオン飲料を少しだけ(20~30ml程度)飲ませてみて様子をみます。

ミルク(人工乳)は必ずしも薄めなくてもよいですが、薄めて与える場合は半分に薄めて、1~2日以内で元に戻してください。

大きな子なら、絶食も少しは効果ありますが、乳幼児では長くても3時間程度で飲ませ始めましょう。

3 どうして下痢を止めないの?

下痢はお腹に悪いウイルスとか細菌が入ったために起き、それらを体内から早く排出させるための体の反応です。ですから、下痢止めなどにより排出しようとする働きを止めてしまうと、ウイルスや細菌が腸の中で増えるために、さらに症状が悪くなることがあります。

このような理由から、下痢を無理に止める必要はありません。整腸剤といわれる乳酸菌製剤などで、腸管内の悪い細菌などが増えにくい状態にします。

下痢は悪いウイルスを
体外に排出しようとする
働きです。ですから、
下痢を止めてしまうと
悪いウイルスがかえって
腸内で増えてしまうのです。



下痢を無理に
止めないことも
大事な治療です。

4 どんなものを食べさせてもよいの?

まずは水分を与えてください。しっかり水分を取れるようになったら、おかゆ程度から食物を開始しますが、初めは量を控えめにしてください。

その後食欲が出てきて嘔吐が無ければ、おじや・うどんなどのでんぷん質、次にご飯・煮た魚や野菜などを与えましょう。

生ものや脂肪の多い食品(ラーメンや唐揚げなど)は元気になってから食べさせましょう。

おかゆ・おじや
うどんなどを
少しずつ
食べさせてみる



こんな場合は

回数が少ない
腹痛が軽い
元気がある・機嫌がよい

こんな場合は

回数が多い
腹痛が強い
ぐったりする・機嫌が悪い
便に血液が付いている

少し様子を見てみましょう

急いで受診しましょう

腹痛 (ふくつう)

1 お腹が痛いといえます

発熱していないか、吐き気がないか、下痢をしていないか、お腹を抱え込むように強く痛がらないか、激しい泣き方をしていないか、お腹が張っていないか、どのあたりが痛いかなどに注意しましょう。

熱がないか
吐き気がないかなど
注意する



2 お腹が痛いときはどうするの？

おなかをさわってみましょう。

左上から左下の方を痛がるときは、便秘の場合もあります。このようなときは、排便でなおることもありますので、トイレに行かせてください。それでも出ないなら、浣腸を試みましょう。大便や尿が出たら、血液が混じっていないか、いつものような大便か尿かを確認してください。

トイレで出ないなら
浣腸をして
みましょう。

排便で
なおることも
あるので
トイレに
行かせてみる



お腹の
左上から下を痛がると
便秘の場合も
右下の方を痛がると
盲腸炎の場合も

右の下の方を痛がるときは、虫垂炎（いわゆる盲腸炎）などもありますので、発熱、吐き気、激しい泣き方など他の症状があるか観察してみてください。

軽い腹痛や排便でよくなる腹痛は、様子を見てください。

腹痛が強い、腹痛が次第に強くなる、血液混じりの便や、繰り返す嘔吐（おうと）がある、ぐったりして機嫌が悪い場合は「急いで受診」しましょう。



3 痛みがおさまりましたら？

簡単に痛みがおさまるようなら、少し水分を飲ませてください。

吐き気やおなかの痛みがあるときは、オレンジなどの柑橘系のもや牛乳類は飲まない方がよいでしょう。飲ますとよけいに痛みが強くなるか、吐き気を示すこともあります。

オレンジなどの
柑橘系のもや
牛乳などは
飲ませてはダメ！



こんな場合は

日ごろ便秘があり軽い腹痛である
排便してよくなる

少し様子を見てみましょう

こんな場合は

ぐったりして機嫌が悪い
吐いたり便に血が混じる
腹痛が強くて動けない
腹痛が続き次第に強くなる

急いで受診しましょう

喘鳴（ぜんめい）

呼吸に伴って、ゼーゼー、ヒューヒューという音が聞こえるのを喘鳴といいます。これは鼻・喉・気管支など、息の通り道のどこかが狭くなっているときに聞こえます。

1 喘鳴が聞こえる！

呼吸が速い、肩で息をしている、肋骨の間が息をするたびに凹んでいるかどうか見てください。

熱があるか、息づかいや顔色・汗（あせ）の様子もみてください。

いつもはイビキをかかないのに、イビキをかいているかどうか見てください。



水分の補給と部屋の湿度を高くする



背中をさすったりトントンとたたくと痰などが出やすい



2 喘鳴が聞こえたらどうするの？

喘鳴が聞こえても、スヤスヤ眠っている、普段どおりの会話や活動ができていけるなら、朝まで様子を見て大丈夫でしょう。水分の補給を十分に、乾燥した季節は部屋の湿度を高くしてください。

部屋の湿度を上げる方法としては、加湿器の他にも室内に洗濯物を干すとか、濡れたタオルをぶら下げるなどの簡単な方法もあります。

喘鳴が強いときは、体を起こして壁やお母さんに寄りかかる姿勢にすると、お子さんは少し楽になります。痰などの分泌物を出やすくするため、水分を少しずつたびたび飲ませ、背中をさすったり軽くトントンと叩いたりしてあげると、痰を出す効果があります。

喘鳴は、夜中に強くなり、昼間は軽くなったり聞こえなくなったりしますので、喘鳴が聞こえた翌日には小児科を受診してください。

3 喘鳴が強いときは？

喘鳴が強くなり、息苦しくて眠れなかったり、横になれなかったりするときは、「急いで受診」しましょう。

喘鳴は聞こえなくなるのですが、呼吸状態がさらに悪くなり、肩で呼吸する・顔色が白い・唇や爪の色が紫色になることもあります。この場合、救急車を呼び「至急受診」してください。

咳（せき）

1 咳が出ます！

10分に1回くらいゴホッという咳は、様子を見ても大丈夫です。

発熱しているときや何度も咳き込んで吐くときは、「様子を見ながら受診」しましょう。

2 咳が出たらどうするの？

水を少し飲ませ、窓を開けて換気すると楽になることがあります。

痰を出させるためには、水分をとること、体の向きを変えること、背中を軽くたたくことなどが有効です。

喉がイガイガして出る咳（コンコンという乾いた咳、痰がからまない咳）は咳止めなどで止めるようにしますが、痰がからんだ咳（ゴホゴホという湿った咳）は痰を出すための大切な咳ですので、止めすぎないことが大切です。

ぬるま湯で湿らしたタオルを口や鼻にソッと当ててみると、痰が出やすくなることもありますので、試してください（但し、長くても15秒程度でやめてください）。



蒸したタオルを手で持てるまで冷して口や鼻にそっと当ててみる

こんな場合は

痰が切れずに咳き込むことを繰り返す声がかすれ、犬が吠えるような咳をする呼吸にあわせてヒューという音がする突然むせて激しい咳き込みが続く

急いで受診しましょう

乳幼児で呼吸数が普段より多く（1分間に50回以上）、顔色が悪くなって、息が苦しそうなときは、「急いで受診」しましょう。

気管支喘息（小児喘息）などといわれたことがあり、呼吸が苦しそうでゼーゼーという音が聞こえ、肋骨の間がへこへこ凹む呼吸（陥没呼吸）があるときには、「至急受診」しましょう。



発疹・湿疹(ほっしん・しっしん)

発疹には、ウイルスの感染・かぶれ・ジンマシンのように急に出てくるものと、湿疹・アトピー性皮膚炎のようにずっと出ているものがあります。

1 発疹がでました！

どのような発疹ですか？かゆがりますか？発疹が広がりますか？発疹の場所を痛がりますか？

発疹の形は小さな赤みなのか、いろんな形をした大きなものか、水ぶくれもあるのか、少し盛り上がっているのか、発疹は出たりひいたりしているのか、透き通ったもので押さえて赤みが消えるか、などを観察してください。



2 発疹の原因は？

ウイルスの感染：はしか、風疹、水ぼうそう、突発性発疹、手足口病、水いぼなど

かぶれ：植物、動物、洗剤、塗料、砂、金属など

その他：ジンマシン、薬の副作用、虫刺され、とびひ、あせも、川崎病など色々ありますので、様子を見ながら受診してください。また、お子さんの体質や最近の生活を振り返って、何か原因はないか考えてみてください。

3 発疹がでたらどうするの？

急に出ることが多いのは、ジンマシンです。ジンマシンは、何らかの食べ物が原因となることもありますが、原因不明のことも多く、出る場所によって大きさや形の違う、淡く赤い色で少し盛り上がった発疹です。

ジンマシンでも、強いかゆみがないとか、発疹が数個だけならばその部分を冷やしてみるか、普段使っている虫刺されや湿疹の薬を塗って様子を見てみましょう。

重症なジンマシン・虫刺され・アレルギーで、発疹が強い・かゆみが強い・顔や唇が腫れている場合は「急いで受診」してください。

呼吸が苦しい（ゼーゼーという呼吸など）・顔色が悪いなどがあれば、救急車を使ってもよいので「至急受診」してください。

まれですが皮膚に赤い点状の出血が出ることがあります。採血のときに大泣きしたり、繰り返す強い咳で顔に点状の出血が出ることもありますが、膝の下やほかの場所に紫色の出血を伴っている場合は、検査のできる昼間に受診しましょう。

それ以外の発疹で急いで受診する必要はありませんので、様子を見て適切な時期に小児科または皮膚科を受診しましょう。



けいれん(ひきつけ)

急に体の一部または全身をピクピクさせたり、ガクガクさせたり、意識がなくなって、目が固定してグーッと突っ張ったりすることを「けいれん(ひきつけ)」と言います。

小児は色々な原因(脳炎、てんかん、頭の外傷など)でけいれんを起こしますが、最も多いのは熱性けいれんです。

1 熱性けいれん

発熱に伴って起きるけいれんで、脳の病気が無いけいれんです。6ヶ月から6歳までの小児が熱性けいれんを起こしやすく、また熱性けいれんを起こしやすい体質のお子さんもあります。「熱性けいれん」の多くは良性なので、後遺症の心配はありません。小児の5~10%は熱性けいれんを起こしますが、2回以上熱性けいれんを起こすのはそのうちの40%程度であり、3回以上はさらに少なくなります。

2 けいれんをおこしました！

お子さんのけいれんに気づいたら、あわてて抱き上げたり、ゆすったり、頬を叩いたりしないで下さい。

けいれんの時にあわてないでいても難しいのですが、けいれんだけで命にかかわることはありませんので、気をしっかり持ち、自分を落ち着かせてください。

そして、できれば下記のことにご注意してください。

- ① どれ位の間けいれんが続いたかを確認してください。
- ② よく観察(目は？手足は？熱は？吐き気は？何分続くか？など)してください。
- ③ 衣服をゆるめ、横向きに寝かせてください。舌を噛まないようにと、口の中にも物を入れてはいけません。



3 けいれんをしたらどうするの？

次の場合は、「至急受診」しましょう。

- ① 初めての子けいれんや6ヶ月以下、6歳以上のけいれん
- ② 5分以上続くときや、繰り返すけいれんがあるとき。
- ③ けいれんの止まった後、意識がもどらないとき。
- ④ 手足にマヒがあるとき。

これまでに熱性けいれんを起こしたことがあり、以前の熱性けいれんと同じような具合の場合は、「様子を見ながら受診」しましょう。

4 けいれんの予防は？

けいれんを繰り返す場合、予防するための坐剤を使うことがあります。詳しくは、かかりつけの小児科医に相談しておきましょう。



誤飲（ごいん）

子どもが、飲み込むと危険なものを飲み込んだ場合を誤飲といいます。家庭の中であっても、子どもに危険なものはたくさんあります。タバコ、医薬品、漂白剤、殺虫剤、燃料（灯油など）、ボタン電池などです。

1 誤飲しました！

落ちついて、何を飲み込んだのが周囲にあるものから推測してください。

灯油などの揮発性のある石油製品と漂白剤、強い酸やアルカリの製品などは、吐かせるとかえって危険ですので、診察を受けましょう。これ以外の場合は、一度、吐かせてみるとよいでしょう。

飲み込んだものの残りや、吐いたもの、その容器、添付説明書などは、診察を受けるときに必ず持参して下さい。



2 タバコの誤飲

“タバコを食べてしまった”といっても、あまりのニガさのために普通は1cmも食べてはいませんが、その場に残っているものを確認してください。それからお子さんが飲み込んでいるかもしれませんので、吐かせてみます。吐いたものの中に、タバコの葉が1、2枚程度でしたら、あわてないで大丈夫です。

2cm以上を食べたようでしたら、できるだけ早く診察を受けましょう。

特に、タバコの吸い殻を入れた水を飲んだ場合は、危険ですので「急いで受診」しましょう。



※タバコは、お子さんが誤飲するだけでなく、喘息等健康にも悪影響を及ぼしますので、禁煙に努めましょう。

3 心配のない誤飲物

体温計の水銀、クレヨン、石けん、インク、絵の具、化粧水、シリカゲル、線香など



4 吐かせ方

指をノドの奥に入れて舌を押し下げてください。



5 ノドに詰まっているとき

- ①頭を下にして背中を叩いてください
- ②1歳以上であれば後ろからお子さんのおなかの前で指を組み、お子さんのお腹を上後ろ方向に強く引き上げます。



注：子どもの周りにタバコや灰皿をおかないなど、大人が注意することで誤飲の大部分が予防可能です。

【中毒110番】

化学物質、医薬品などによって起こる急性中毒について、日本中毒情報センター（中毒110番）において、一般の方に無料で情報提供をしています。

（大阪 072-727-2499）24時間対応

（つくば 029-852-9999）9～21時対応

夜間や休日に急に具合が悪くなったとき

もし、夜間や休日などの診療時間外に、子どもの具合が急に悪くなった場合の高知県の小児救急医療体制は下記のとおりになっています。

① 「こうちこども救急ダイヤル」による医療相談をご利用下さい。

ベテラン看護師による電話相談を実施しています。

*** 電話番号 #8000**

又は (088) 873-3090 です。

(相談時間帯：毎日、午後8時～午前1時まで)



② 診療が必要と思われる場合は、「かかりつけ医」やお近くの医療機関に、電話連絡のうえ受診するかまたは下記の「急患センター」を受診してください。

高知市平日夜間小児急患センター (088) 875-5719 高知市丸ノ内1丁目7番45号	月曜～金曜日 診療時間：午後8時～午後11時まで 毎週土曜日及び祝日の前日 診療時間：午後8時～翌日午前8時まで
高知市休日夜間急患センター (088) 875-5719 高知市丸ノ内1丁目7番45号	日曜・祝日・年末年始(12月31日～1月3日) 診療時間：午前9時～午前12時(概ね内科) 午後1時～午後5時(概ね小児科) 午後6時～午後10時(小児科) ※祝日が土曜の場合、午後6時～翌午前8時まで ※日曜の午前中のみ耳鼻咽喉科及び眼科診察 ※診療科に「概ね」と記載されている場合は、記載診療科以外でも診療可能な場合がありますので窓口にご確認ください。

③ お近くに受診できる医療機関がない場合は、「高知県救急医療情報センター」に電話連絡をお願いします。

小児科医のいる当番病院など受診可能な医療機関を紹介いたします。

*** 電話番号 (088) 825-1299 (24時間365日対応します)**

(2017.4.1 現在)

このガイドブック作成に当たっては、下記の文献から多大の部分を利用しました。
 「お子さんの急病対応ガイドブック」 (公社) 日本小児科医会

(家庭用メモ)

・医療機関名	電話番号

・住所	_____

・医療機関名	電話番号

・住所	_____

・医療機関名	電話番号

・住所	_____

その他	
